

グローバル通信

2008 vol.10

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN

梅雨も明け、いよいよ夏がやって来ました。

コースの院生にとってはまとまって研究を進め、あるいは大学を出てフィールドワークにいそしむ大きな機会です。気温にも体温にも負けない研究熱で夏を越えましょう。

今号は、論文作成に生かせるノウハウとして、タイムスケジュール例や図書館利用のTips、OBの経験談などを掲載、また、企画企画も掲載しました。さらに、地域対策の先駆者が直接語った講演会抄録もぜひご覧下さい。公開講演会は後期も続々企画されています。コースの雰囲気味わいにきて下さい。(編集部)

変革する地方自治	1
琵琶湖を子どもたちの未来に ～滋賀県環境生活協同組合の挑戦～	1
夏休みの過ごし方	2
図書館利用案内	2
公開講演会から	3
修論発表会	3
夏休みの合宿	3
GPインフォメーション	4
事務局インフォメーション	4

CONTENTS



変革する地方自治

四方八洲男氏 (京都府綾部市長)

地方自治は、地方分権の進展や公務員制度改革推進の真つただ中であって、スリムで効率的な行政経営を目指した改革の必要性が叫ばれております。

今後は、国や都道府県の指示や判断ではなく、市町村独自で意思決定した施策を展開することが求められており、地方自治体の役割はますます重要になります。

厳しい行財政改革の中であってこそ、一步踏み込んだ住民と行政と連携・協働関係を築き、地方自治を確立する必要があります。

このたび、「地域リーダーシップ研究」講演会において、綾部市の「水源の里」における取組をご報告する機会をいただきましたが、この取組は、水源の里の集落の皆さんの活動を市の職員が支え、共に汗を流し集落の再生と活性化を図ろうとするものであり、水源の里の集落の皆さんと市の職員が、苦しみや喜びを分かちあい集落の振興を目指そうとするものです。

集落という住民自治の最小の単位に着目し、市民と行政が一体となって取り組む「水源の里」事業は、従来以上にきめ細やかな対応をしており、市や職務に携わる職員には、複雑化・高度化した課題や多様化した住民ニーズにいかに対応できるか、創意工夫をこらして政策形成ができるか、豊かで柔軟な発想ができるかなど、幅広い視野が求められています。

私が市長に就任しましたのは平成10年2月で、同年4月の職員数は468人でした。

平成22年4月には380人の体制を目指しており、現在387人まで減員をしましたが、これにより住民サービスの低下を招くことはありません。

「少数精鋭」という言葉がありますが、少数だからこそ精鋭になるのです。

今後も「組織活性化に資する人的資源を開発するのは自分自身である。」ことに全職員が自覚を高め、自ら学ぶ姿勢を基本に人材育成制度の確立を目指した『人を育てる環境づくり』を主体的に進めていきます。



琵琶湖を子どもたちの未来に ～滋賀県環境生活協同組合の挑戦～

藤井 絢子氏 (滋賀県環境生活協同組合理事長)

今年もびわ湖に暑い夏がやって来ました。既に水位はマイナス。このまま1993年夏、マイナス123cmを記録した、大渇水の二の舞にならぬよう、と祈る思いです。一方、昨今は暖冬で、琵琶湖の大循環(深呼吸)にも異変がおき、低酸素化が懸念されています。

さて、1997年5月27日は琵琶湖にとって、又、せっけん運動を担った私たちにとって忘れてはならぬ日です。赤潮の大発生!“ただならぬことが琵琶湖におきている。私たちも琵琶湖を汚している加害者だ”という意識の高まりが、うねりをよそに湖国中に広がったのです。

1989年6月、環境生協は、この運動を土台に一步進め、リサイクル事業・水の自主管理(合併浄化槽普及)・エコロジー商品普及事業・ソフト事業(代替エネルギー、エコロジーマーケット開催、講演など)の4本を柱に、全国初の環境専門の生協として社会宣言しました。

1990年代に入り、水汚染への対応と並行し、地球温暖化へのプログラムづくりに取りかかりました。廃食用油からせっけんへ続く、第2の出口としてバイオディーゼル燃料化をスタートさせたのです。“天ぶら油で車が走る”は、いまや全国あちこちで展開されるまでになっています。

1998年、京都会議の翌年からは、いよいよ食とエネルギーの地産地消、地域自立のモデルとして“菜の花プロジェクト”を始めました。種を播く→菜の花畑で花見→刈り取る→食用にする→廃食用油を回収し、燃料化する→化石代替燃料としてディーゼル車輛・農耕機・船・発電機などに利用する。このわかりやすく、ワクワク感のある循環の地域モデル“菜の花プロジェクト”は、全国に、海外に、と共感の輪は驚く程のパワーをもって広がりを見せています。

みなさんも是非、発信地湖国滋賀で、人・知恵に出会ってください。

夏休みの過ごし方

前期終了。ひと息ついたら、夏休みだからこそ、授業期間中にできない研究をするチャンスです。

修士論文作成年間プラン例

4月入学

- 資料収集、文献講読のはじまり
- 指導教員の指導を受けつつ、研究テーマから論文の章だてに練りあげる。

6月ごろ

- 論文の核となる論旨がみえてくる
- 重要文献を意識する
- 論文章だての中心部分がみえてくる

夏休み

- 資料、文献講読やフィールド調査の機会!!
- 章だての枠組みを固める
- 論文の各部分、重要論点、章だての書けるところを手探りでも書き始める（ただし、指導教員と相談すること）

↑ 先に書けるところ、重要な論点をまず一定の分量書くことで、その後の執筆の呼び水にすることを狙いましょう。

後期開始

- の内容・分量から章だてを再整理する
- 指導教官に密に相談・連絡し、指導を受ける
- 中間発表を目指して作業を進める

11月半ば

中間発表

- 指摘された論点の整理
- 資料やデータなど不足分を集める
- 章だての項目で手薄なものを厚くしていく

12月半ば

目標・一稿完成?

- 一稿を基礎に指導教員から指導を受ける
- 「京都から発信する都市政策」で発表してみる（中間発表の修正版をベースに）

年末年始

総仕上げ

- 校正、検討、また校正。
- 論文の提出（今年度は1月20日(火)です!)

二月上旬

- 口頭試問

(定稿)

私の夏休みの過ごし方

田中 泰信（経済学研究科2007年度修士生）

「論文に関する本を100冊読め。」と言う先生がおられました。確かに、論文に着手する前の夏休みは、本を読むには一番良い時期であります。私の場合は、単位取得に無理をしまい、レポート6つを夏休み前半2週間で書き上げねばなりません。その結果、疲れ果て、読書をする気力は失せたまま夏休みが過ぎました。

私の論文のテーマは、仕事に関するもので、既に関係書60冊程度は読んでいたのですが、論文作成に際しては、直接には役に立つ読み方でないことが分かりました。報告書を書くのとは違い、論文にとっての本は、引用文献としての位置づけがあること、そして、論文作成が進むに従い、読むべき本も次々変わることです。結局は、論文を書きながら、並行して精読することになりました。

でも、「夏休みは取り敢えず本を読め。」これが私のアドバイスです。やはり本をたくさん読み、記憶の小引き出しを一杯にして置くことは必要です。必ず役立ちます。

中村 晋一郎（法学研究科2007年度修士生）

社会人の私としては、仕事が休みになるわけではないので、あまり休みという感じはしなかったのですが、それでも週に何回かあった授業は無くなるため、その時間を活用して論文の執筆にあてようと考えていました。しかし、最初に決めていた介護予防というテーマがあったものの、様々な授業を受けたり先生方とお話することで、あれもやってみたいこれもやってみたいと構想だけが一人歩きしてしまい、肝心の論文のテーマを決められないという状態に陥っていました。夏休み中は全て介護保険制度の全体にわたる問題点について考察しており、テーマをしばりきれぬまま終えてしまったという過ごし方でした。ただ、論文執筆は最終目標ではなく、この期間中に学習したことや収集した資料はこれからの仕事の上で非常に役立つものだと思います。ですので、夏休み中は論文執筆ということだけにこだわらず、せっかくの機会を生かして色々なことを勉強すれば後々大きなプラスになると思います。でも後期授業開始までに明確にテーマがしばりきれないかと正直やはりしんどいと思います。

夏休みの過ごし方(図書館編)

論文を書くうえで欠かせないのが、文献情報などの資料収集です。上記の年間スケジュールにあるとおり、夏休みは論文の核となる文献収集に時間がとれる大きなチャンスです。ここでは図書館の活用の仕方として、データベースの利用法をご紹介します。龍谷大学では、図書検索、論文検索、記事検索、法令・判例検索など約70種のデータベースが学内/学外から利用できます。図書館ホームページトップ画面の〈資料検索〉をクリックするとデータベース入口となります

具体的な例として、国内文献を検索する、NII論文情報ナビゲーターCiNii(サイニイ)とMAGAZINE PLUSの特徴を紹介します。MAGAZINE PLUSは学術誌・大学紀要・専門誌を中心とした、雑誌記事索引で国内最大のデータベースであり、検索結果には龍谷大学に所蔵されているか否かが反映されて出てきます。

一方、CiNii(サイニイ)は収録数では劣るものの、検索方法がきめ細かく、検索結果にリンクが多いため、データベースとしてはかなり使いやすい設計です。両データベースは学外からもアクセスできますが^{※1}、種類によっては学内からしかアクセスできない種類ものもありますので、その場合は図書館内のインターネットコーナーもご利用下さい。

この様にデータベースごとに様々な特徴がありますので、一度ホームページにアクセスして下さい。また、図書館のレファレンスカウンターでは、データベースの使い方に関する資料をはじめ、資料が他大学にあった場合に、文献複写や文献取寄などの受付を行っておりますので、積極的に活用して下さい。

(※図書館ニュースレター「来・ぶらり」や「LIBRARY GUIDE 図書館利用ガイド」には、毎月図書館の活用法について特集されています。) (定稿)

※1.CiNii(サイニイ)は一般公開部分のみ検索が可能です。(大学契約部分のアクセスはできません)

②資料検索をクリック

①図書館トップページ

③各種データベース画面へ



図書館利用ガイドブックなど



図書館利用ガイド

「来・ぶらり」

*学外からアクセスする場合はここをクリック

最新の夏休み開館予定は、<http://opac.lib.ryukoku.ac.jp/hp/index.html>にてご確認ください。

公開講演会から

報告1 先進的地域政策研究 (5月24日)

地域を支える図書館づくり

(講師：渡部幹雄・滋賀県愛荘町教育長)

堀口秀義 (法学研究科)

滋賀県愛荘町立愛知川図書館は「ライブラリー・オブ・ザ・イヤ－2007大賞」を受賞しました。これは「成長する図書館」をキーワードに、地域づくりと図書館づくりを見事に結びつけた成果であり、これからの図書館のあり方を全国に発信するものと言えます。その活動の牽引者である前館長(現愛荘町教育長)の渡部幹雄氏にご講演いただきました。

渡部氏は大分県大野市生まれで、幼少期は身近に図書館が無く、その存在を知った時の、また初めて利用した時の衝撃・感動は大変なものであったそうです。修学を終え地元の町職員として帰郷した氏は、図書館を持たなかった町で、町立図書館の前身となった私設

図書館を構えました。行政による図書館整備は70年代の経済成長期に、他の公共インフラと共に進められましたが、都市部の論理に基づいて行われたため地域格差が生じ、また設置されても地域ニーズに合わず、現在でも地域の情報集積・情報発信のコアと成りえていないものも数多くあります。教育施設である図書館でも「地域における自らのあり方」をもっと真摯に考えないといけないというお話しは大変熱の入ったものであり、これは自治体業務全体についても共通すると訴えられました。自治体職員であり日々の業務に追われている私には、氏の言葉は大先輩からの最前線職員に対する熱いエールと感じられました。



報告2 地域リーダーシップ研究 (6月21日)

『限界集落を抱えた首長の苦悩と挑戦』

(講師：四方八洲男・京都府綾部市長)

田中貞昭 (経済学研究科)

綾部市の四方八洲男市長をお迎えしての講演は、トップリーダーとして人々の意識を変える言葉と行動力を実感させるものでした。水源の里にまつわるお話で、産業がある・コミュニティとしての機能している・都市との交流・リーダーがいる、というキーワードを具現化したこと、また条例も時限立法とし、実行に移す中で委員の意識を変革させていくことはなかなかできることではありません。やはり、トップリーダーとしての資質と強固な信念、そして人と人とのネットワークがあればこそ実現できることと思えます。

今後、地方行政は分権の時代といわれ、地域格差の時代を迎えています。これからの地方は何をすべきか明確なる指針のもとと船

をこぎ出さなければいけません。その明確なる指針をだしていくトップリーダーたる資質が今後ますます問われる時代となってくるはずです。私たち、行政職員も明確なる地域政策を形成することにより、地域再生を図っていくことが、今後の地方行政を考える上で、一番大事であることを再確認することができました。いま、自分に何ができるか、もう一度探ってみる機会を与えていただいた、素晴らしい講演でした。



修論自主発表会



企画者 朝倉 健太 (法学研究科)

2008年6月14日土曜日、深草キャンパスにてNPO地方行政研究コースの修論自主発表会を開催しました。修論自主発表会を企画した目的は、在学生だけでなく、修了されたOB・OGの方も呼びし、相互の交流を図ること、また水曜日と土曜日に開講している特別演習の院生が集いお互いのテーマや進捗状況を知る機会になることを

目的として開催しました。参加者は在学生が8名、OB・OGの方が3名、学部生が1名参加されました。内容は在学生の修論中間発表となり、本年度修論を提出される7名の院生が論文のテーマや内容を発表し、それに対して質疑応答をするというものでした。約3時間にわたる長丁場となりましたが、非常に有意義な時間を過ごせたと感じました。終了後OB・OGの方から「在学生がいまの何を研究し、どういった問題意識を持っているのかを知ることができてよかった」とのコメントをいただき、在学生からも「いい取り組みでした」との意見をもらいました。

経済学研究科では6月の後半に修論の中間発表をしています。法学研究科ではそうした試みがありませんので、せめてNPO地方行政研究コースで何か取り組みをしたいと考えていました。今回は、はじめての試みということもあり勉強会をどうするか非常に迷いました。在学生による修論発表も1週間前に決め、発表者には時間もないまま発表をしていただいたことは反省するところです。今後もこうした機会を企画し、NPO地方行政研究コースに来られているみなさんや修了されたOB・OGの方たちが「大学院に来てよかった」と少しでも思えるようにしていきたいと考えています。

夏休みの合宿

2008年度 NPO・地方行政研究コース
特別演習現地調査企画

- ・日程:2008年8月2日(土)～3日(日)
- ・8月2日13:00近江八幡駅集合
- ↓
- 移動
- ↓
- 15:00マルチメディアセンターの視察、担当者からの講演、質疑応答
平成12年度に近江八幡市が設置した公共施設で、平成18年4月からは、民間活力の導入によるサービス向上と経費節減を目的に、市の直轄施設から「指定管理制度」へと移行し、現在は「CM2グループ」が指定管理者として市に替わって施設の運営・管理をしているもの。
- ↓
- 近江八幡ユースホステル宿泊
ホステル内で食事、懇親会
- ・8月3日
- 近江八幡の観光パスポートを使って、重要文化的景観「近江八幡の水郷」の街並みを散策
- 9:00かわらミュージアム
体験工房で八幡瓦の表札づくりなどの体験(2時間弱)
- ↓
- 市立資料館の見学
- 八幡山ロープウェー
- ↓
- たねやで昼食
- ↓
- お昼過ぎに解散、もしくは休暇村などの温泉に行ってから解散。

■「志の森」特別講座：環境政策シミュレーションを使った政策形成

9月27日(土)、10月4日(土)・5日(日)の3日間にわたり、「志の森」と題し、特別講座が開催されます。地域公共人材として公共政策の形成の理論と実践を学ぶ機会です。27日の概論のあと、4日、5日には地域環境資源を使った環境政策を、誰でも利用できるシミュレーターPEGASUSを使い、グループワークで学び、論じ、形成します。4日は合宿形式となり、講師とじっくり語る「夜なべ談義」がついています。龍大からは富野暉一郎・白石克孝・土山希美枝も参加し、本コースの修了生や環境政策にかかわる一般の方も参加予定。費用は交通費と宿泊施設利用費(850円)のみ。ぜひ参加を!

■アメリカ・インターンシッププログラム

本コースでは、実践的な研究・学習機会として、国内外でのインターンシッププログラムを提供しています。今回は、2008年2月25日から3月10日にかけて、カリフォルニア州バークレイ市とオークランド市で、連携協定先であるJPRN(日本太平洋資料ネットワーク)の協力を得て実施した国外インターンシップについて紹介します。

今回、参加した2名の学生は、「まちづくり組織としての役割」と「地域住民の合意形成とパートナーシップ」の2つの角度からバークレイ市で活動しているコミュニティ開発のNPOや住民団体の代表の方からヒアリングを行い、ボランティアサービスなどの実務体験をしてきました。

ベイエリアのダイナミズム

朝倉 健太 (法学研究科修士2回生)

今回のインターンシップで印象深かったのは、アメリカでは多様な人間が議論し、関心を持ち、他にはないユニークさを作りあげていく政治空間や公共空間ができていたと感じたことです。議会に押しかけ、いまバークレイで何が問題なのかを真剣に聞き入る多くの人々、市役所が強権に訴えればデモをして自分達の主張を展開する人々。

日本ではそうした空間ができていますでしょうか。もちろん、まったくないとはいきませんが、地域のことに無関心であったり、議論することを避けたりしてはいないでしょうか。「そうではなく、自分達のまちは、地域は、自分達でユニークに作り上げていく。そうしたことを実行する必要であるのではないか」インターンシップを通し、そういったことを学びました。

社会人大学院生が海外インターンシップで学べること

櫻井 あかね (法学研究科2007年度修了生)

今回、私は社会人大学院生として海外インターンシップに参加しました。社会人として研修のために1~2週間の休暇をとるのは難しいものですが、インターンシップで得られたことはそういった困難を忘れさせるほどの素晴らしいものでした。特に、次の3点は私の今後の活動にとっても有意義なものになると思います。ひとつには、バークレイの革新的な歴史の中でカウンターカルチャーとして大きな存在感をもつNPOとその草の根の市民活動が息づいている様子、つぎに、直接現地で話を聞くことで、これまで日本で紹介されてきたアメリカのNPOとは全く異なるNPO像を発見できたこと、そして最後にバークレイにおける歴史的建造物の保存や小売業商業の活性化における具体的な取り組みを視察したことによって、新たなアイデアを得たことがあげられます。

■事務局インフォメーション

1 NPO・地方行政研究コース懇談会および特別講演会開催について

NPO・地方行政研究コースでは、地域連携協定を結んでいる各団体の担当の方々への次年度の推薦入学者募集説明と各団体との意見交流を目的とする懇談会を開催します。今後、本コースが展開する教育・研究活動についても詳細な説明を実施します。

日時 2008年7月24日(木) 12:00-13:40

場所 龍谷大学深草学舎紫英館5F会議室

内容 1. NPO・地方行政研究コースの現状報告
2. 2009年度NPO・地方行政研究コース推薦入試について
3. NPO・地方行政研究コース新たな展開について
4. 意見交換

また、懇談会終了後、北九州市環境局環境政策部環境首都推進室長 櫃本礼二氏の講演会を予定しています。

なお8月2日(土)にはオープンキャンパスを深草学舎で開催します。面談で直接進学希望の方の御相談を受け付けます。

2 協定の更新状況について

現在、NPO・地方行政研究コースでは地域連携協定の3年ごとの更新時期にあっており、担当教員および事務局が協定先担当者の皆様に訪問・電話等のコンタクトをおこなっているところです。おかげさまで多くの団体から協定更新のお返事をいただいております。また、新規協定先も徐々に増えているところです。今後ともよろしくごお願い申し上げます。

3 「分権型社会を拓く自治体の試みとNPOの多様な挑戦—地域社会のリーダーたちの実践とその成果—」第5号について

NPO・地方行政研究コースでは、2007年度実施した「地域リーダーシップ研究」および「先進的地域政策研究」の講演会・シンポジウムをまとめた論集をつくりました。ご希望の方は、欄外連絡先までご連絡ください。

第1部 地域リーダーからの発信

第2部 NPOの多様な挑戦

第3部 シンポジウムから

大学院教育が目指す地域公共人材育成への挑戦 (仮)

NPO・地方行政研究コース ニュースレター『グローバル通信』通巻10号 2008年7月

発行/龍谷大学大学院 NPO・地方行政研究コース 連絡先/教学部(深草) TEL: 075-645-7891 FAX: 075-643-5021

H P/ http://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/
編集/大矢野修、松浦さと子、土山希美枝 (編集補助) 藍澤ゆかり、西原京春、定松功、朝倉健太、鳥居良寛
印刷/株式会社 田中プリント